

【海外からの風】

## 愛知県立大学・サンパウロ大学哲学文学人間科学部 学術交流締結 5 周年

——「手さぐり」から「手づくり」の学術交流奮闘記——

川 畑 博 昭

### はじめに

2010年6月に締結された愛知県立大学（Aichi Prefectural University——以下、県大と略記）とサンパウロ大学哲学文学人間科学部（Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas da Universidade de São Paulo——以下、USPと略記）との学術交流協定は、今年度最初の更新時期を迎えた。順調に更新手続きを終え、教員と学生の「国境を越えた交わり」が、止むことのない川の流れるように続いている。この大学間協定の署名・締結からその後の運営にとって、我々に範とする先例はなかった。あるいは、我々がめざしたものは、前例がない「唯一無二の協定」であったと言ってもよい。そのためには、当然、「模索することをやめない手」と「新たにつくり出していく手」の2つが、常に求められた。ポルトガル語では「交流」のことを“*intercâmbio*”と言う。確かに、「相互の（*inter*）」「交換（*câmbio*）」に違いなかった我々の5年間の活動は、「手さぐり」で「手づくり」であることをめざし、「相互に」何を「交換」し、研究と教育の内実を豊かにしてきたのだろうか。相手大学の顔も知らないまま、学生を送り出し受け入れる協定でなかったことだけは確かである。「国際化」の用語はすでにお蔵入りし、「グローバル化」もしいに手垢のついた用語になりつつあるかに見える。だからこそ、「越境する学問と教育」の何たるかを問い続ける意味があるはずであろう。文字通りの「学術交流奮闘記」であり、記録に残す所以でもある。

## 1. 「悪戦苦闘」の第1段階（2008年4月～2008年11月）

### (1) 協定への道を開いた留学生のひとこと

本協定の端緒は、日本人がブラジルへ移民を開始した1908年以降の1世紀にわたる両国関係を、「日本・ブラジル交流100周年」と位置づけ記念した2008年に遡る。この年の4月より1年間、愛知県飛鳥村出身の祖父をもつという日系ブラジル人3世のシンチア・ヤバセ（Cinthya Yabasse）が、愛知県の県費留学生として県大に留学してきた。彼女は当時、すでにブラジル検察庁の事務職として働く社会人であったが、USPの哲学文学人間科学部東洋言語学科ポルトガル語日本語専攻の夜間コースの卒業生であった。研究において、若干ブラジルとの関係を持っていた私が、行きがかり上、彼女の指導教員としての役割を引き受けることになった。日系とはいえ3世ともなると、すでに自宅で日本語が話されるような環境にいる者はそう多くはない。世界最大規模の日系社会を誇るブラジルにおいてそうである。ハワイやペルーの日系社会についても、推して知るべしであろう。

さて、シンチアも来日当初は、日本語全体にというよりは、授業で求められる漢字の量に悪戦苦闘していた。日本では小中学を通じて、徹底的に漢字の練習をさせられるが、そうした経験を共有していない留学生たちは、通常、日本に来てからこれを追体験する。言葉で理解できることと、言葉を超えて理解し合えることがあると考える私は、来日早々、シンチアに日本人学生ばかりの演習（ゼミ）に出席することを求めた。それは、これまでの私の個人的経験からして、シンチアにとって有益であろうことはもちろんのことであるが、むしろ彼女の存在が、日本人学生に放つ意味の大きさを熟知していたからである。一見、おとなしい性格のシンチアではあったが、その努力は並々ならぬものがあり、日ごとに意思疎通能力を高めていったことは、ゼミでの積極的な発言からよくわかった。日を迫うにつれ、ゼミにおける彼女の存在感は、確かなものとなっていった。

留学期間も半ばを越えた9月頃のある日、学食でぼったりと出くわした彼女と一緒に昼食をとった際、彼女が県大を選んで非常に満足していること（実は来日前に県庁より、留学先を名古屋大学にするか県大にするかで迷っていると

の連絡を受けていた)、今後の県大生のために、自分の出身大学の USP と協定が締結されることに大きな意味があると考えていること、そのために自分が橋渡し役になれること、を熱く語ってくれた。覚束ない記憶ではあるが、県大で当時ブラジルとの関係を有していた教員は私を含め2〜3名しかいなかったはずであり、USP とのコンタクトを持っている者は皆無だった。そこで私は、県大と USP との協定の意味を考えた。愛知県はすでに日本でも有数の日系ブラジル人コミュニティを擁する地になっていながら、県大の外国語学部にはブラジル・ポルトガル語の専科はなかった。ちなみに、ブラジルに在る都道府県人会連合の中でも、愛知県の県人会は小規模ではない。移民(歴史)、日系(社会)、労働(経済)、外国語(ポルトガル語)のどの要素をとっても、実現することが望ましい学術交流であると思われた。とはいえ、USP が世界的にも知名度が高いことを知る教員からは、当時、「県大とサンパウロ大学との協定って、釣り合いが取れるのかい?」と心配された。私は、釣り合いが「取れなさそう」に見えるからこそ、自分で現地に赴き、県大の内実をきちんと説明し、協定に価する大学であることを主張すべきであると考えた。外国語教育だけではない。外国での日本研究・教育と切り結び、県大自らが世界展開していくための、あり得る一つの大きな可能性としてである。折しも県大は、2009年より「日本文化学部」(旧文学部の一部)をもつ「新愛知県立大学」になろうとしていた。

USP との協定への道は、こうして、縁あって県大にやって来た一留学生のひとことによって開けたのだった。シンチアがすぐに繋いでくれたのが、USP の哲学文学人間科学部東洋言語学科ポルトガル語日本語専攻の Junko Ota (ジュンコ・オタ——以下、我々が通常お呼びする Junko 先生と表記) 先生であり、のちに Junko 先生から紹介される Madalena Natsuko Hashimoto Cordaro (マダレナ・ナツコ・ハシモト・コルダロ——以下、同様に Madalena 先生と表記) 先生とともに、やがて締結される本協定の USP 側のコーディネーターとなって下さるのである。

## (2) いざ、USPへ！

シンチアが私の所属する文学部日本文化学科（現在の日本文化学部歴史文化学科）に在籍していたことから、私は同行者として、同じ学科の上川通夫先生（現学部長）を引っ張り出した。当時、上川先生が我々の学科の国際交流担当であったことは、実は形式的な理由に過ぎなかった。本音のところは、着任して3年ほどしか経たない私にとって、県大の諸事情を熟知し、決して「県大らしさ」の観点を置き去りにすることなく、大所高所から物事を把握する先輩教員として、すぐに上川先生との渡航を考えたのであった。この先生となら、我々の学部のみならず県大のことをアピールできると確信していた。Junko先生より、USPの哲学文学人間科学部に附置されている国際交流局（Comissão de Cooperação Internacional – CCint-FFLCH）の担当者を交えた協議はすべてポルトガル語でおこなわれる旨の連絡を受けていた私は、上川先生にすでに中部国際空港を飛び立った飛行機の中で、「ポルトガル語は何かしますので、横にいて協議内容の進捗状況に諾否を下さい」と伝えたことを覚えている。日本中世史研究者の上川先生は、生まれて初めての南米である<sup>1)</sup>。2008年11月、我々の「手さぐり」の奮闘交流の始まりであった。

あろうことか、この「手さぐり」さは、のっけから大失敗を喫した。Junko先生との約束の当日、我々が宿泊していたサンパウロ市内のホテルからUSPまでの土地勘がない我々は、かなりの時間的余裕をもってタクシーで大学に向った。迷う可能性のある公共交通機関を下手に使うものではない。我々は、起こりうる危険を周到に回避した……つもりでいた。ところが、なかなか到着しない。人の良さそうな若い運転手に「まだなの？」と尋ねると、「この辺はずなんですけど……」と、途方に暮れた表情で、不安そうな答えしか返さない。今から思えば、大学の周辺の住宅街をぐるぐる回わっただけのことだったのだが、そうこうするうちに、約束の時間を過ぎてしまっていた。あんなに危険を回避したのに……。私は運転手に、「我々の携帯は日本のものだから、君の携帯電話を貸して欲しい。約束の時間に遅れているから、先方に連絡

1) この様子は、上川通夫「日本中世史研究と南米への旅」愛知県立大学多文化共生研究所編『共生の文化研究』第2号（2008年）、108～112頁が、詳細に伝えてくれる。

したいのだけど」と言うと、彼はきまり悪そうに、「すみません、僕のケータイ、今故障中なんです」……。万事休した。どこまでもついていないなあ、と心の中で焦り嘆きながら、日本の携帯を取り出して、ほんの目と鼻の先で待っているはずの Junko 先生に国際電話をかけた。サンパウロ大学が遠かった。何と言って良いかもわからない気持ちで、Junko 先生に事情を説明し、深くお詫びを申し上げた。こちらから協定の話を持ち込み、面会の約束をお願いし、この有様である。不可抗力とはいえ、面識もない Junko 先生にとっては、「どこの馬の骨ともわからない」我々の珍道中は、「不躰」としか言いようのないものであったに違いない。今、思い返しても切なくなる。Junko 先生、ごめんなさい。

### (3) 信じてもらえた「馬の骨」!!!

もはや曖昧な記憶ではあるが、我々は約束の時間に1時間半ほど遅れて到着したように思う。Junko 先生には信じ難い「突然の訪問者」、いやひょっとすると「招かざる客」であったかも知れない。ともあれ、挨拶もそこそこに、我々は Junko 先生と協定を管轄する国際交流局に向った。USP からは同局担当者のロザンジェラ (Rosângela) さんと Junko 先生、そして我々2人の、4人での協議が始まった。到着までの予期せぬ事態で戦々恐々と協議のテーブルについた我々(私)に対し、ロザンジェラさんが笑顔で応対して下さったことが救いだった。Junko 先生から事前に言われていたように、協議はすべてポルトガル語である(ちなみに、Junko 先生はポルトガル語と日本語の完全なバイリンガルである)。私は、今般の我々の訪問の経緯と趣旨を手短かに説明したあとは、県大がどのような大学であるのかということと、両大学にとっての協定の意義を伝えた。時折、協議の様子を写真に収める以外、静かに横に座って、私の問いかけに同意をくれた上川先生があとから話してくれたところでは、協議時間で取り交わされた会話のうち、6割から7割は私が話していたというから、本当に無我夢中だった。その感触だけは、今でも鮮明に思い出せる。USP は州立の公立大学ゆえに授業料は無償であるものの(ブラジル国内の公立大学はすべて無償である)、県大は同じ公立大学でも授業料が存在する。したがって、

学生の交換交流の場合には、両大学において授業料が発生しないことを明確に合意し、学生の交換交流に際しては、両国の物価指数の違いも考慮しつつ、奨学金を得よう努め、今後も協定締結に向けた協議と相互の大学を知る努力を続けていくことを確認し合った。その際に、私が繰り返し強調したことが2点あった。1つは、USP側が仮に県大との協定締結を好意的に評価して下さったとしても、少なくとも Junko 先生をはじめ USP の先生方が県大に直接来て下さり、ご自身の目でどのような大学かを確認してからにして欲しい、ということと、もう1つは、小規模でも息の長い交流を目指すこと、そのためには教職員と学生の「双方からの交換」が継続的におこなわれるように努めること、であった。



写真1 協議の様子

協議を終えると、Junko 先生から Madalena 先生を紹介され、両先生方から、USP 内の教員専用食堂で昼食をご馳走いただいた。極度の緊張感から解放された私は、上川先生と顔を見合わせながら、何とも言えず美味いブラジル料理に舌鼓を打った。やがて懇意にさせていただくことになる、生真面目で根っからヒューマンな Junko 先生と、いつもほがらかで心優しい Madalena 先生との「きちんとした挨拶」は、この昼食の場であった。昼食時の会話では、上川先生が両先生と自分の専門や日本とブラジルにおける日本研究について語ってくれた。その合間のふとした瞬間だったと思う。Junko 先生が Madalena 先生に、私のポルトガル語への過大な評価と、県大が今後の協定締結に向けた話し合いをしていくのに相応しい大学であるという趣旨のことを、ポルトガル語で語られたのである (Madalena 先生も日本語を完璧に解されるが、我々を含めた 4

人での会話は日本語で、両先生方の間の会話はポルトガル語である)。私は思わず、心の中でガッツポーズをした(!!!)。その時に初めて、「どこの馬の骨かわからない」(しかも大遅刻という失礼を犯した)我々のことを、「少し信じてもらえたかな」と思えたからである。叫びたくなるほど、心から嬉しかった。「手さぐり」で悪戦苦闘していた霧の中に、一筋の光明を見た気分だった。そして、こうした結果を得ることができたのは、まぎれもなく私が上川先生に同行してもらっていたからである。しばしば協議内容を訳し忘れて、私が勝手に話を続けても決して遮ることなく、持ち前の犀利な想像力を存分に働かせながら協議の状況を正確に把握し、終始冷静沈着に同席してくれた上川先生が、私にとっては最大で唯一の拠り所だった。

## 2. 「心が通じた」第2段階(2008年11月～2010年6月)

### (1) ようやく、USPから県大へ!

それ以後も Junko 先生と Madalena 先生とのやり取りは続くなか、県大は2009年度より「新愛知県立大学」へと改組され、我々の旧文学部日本文化学科は歴史文化学科として、国語国文学科となる旧国文学科と2学科で、「日本文化学部」を構成することになった。この新学部立ち上げの記念行事として我々が考えたのが、日本文化学部が窓口となって協定を締結している国や締結協議に入っている海外の大学から担当の教員を招き、地域の協力機関との連携の下で、新学部設立を記念する国際シンポジウムを開催することであった。対象は、韓国とブラジルである。こうして、2009年11月3日に、「新学部設立記念企画 国際シンポジウム 日本文化の多元性をさぐる——言語・文化・歴史・社会からみる日本文化の研究と発信」を開催し、ついにサンパウロ大学から、Junko 先生と Madalena 先生を県大にお招きすることができたのである。日本語学を専門とする Junko 先生は「ポルトガル語・日本語の比較研究からの日本文化」について、絵画を主たる素材として日本文化を研究されてきた Madalena 先生は「美術史からの日本文化」と題して、それぞれブラジルにおける日本研究を披露して下さった。日本文化を「日本で」専門的に学ぶ日本文化学部にとって、地球上では日本のほぼ反対側に位置する「ブラジルで」の研

究動向が、重要でないはずはない。今の日本の学校教育では、19世紀末から20世紀初頭にかけて多数の日本人が南米に移住した歴史も、ブラジルに世界最大の日系社会が存在する事実も、十分に教えられてはいない。だからこそ、県大における USP の先生方の存在感は、今やブラジルにまで開かれつつある「県大の」日本文化学部の誕生を記念するには、これ以上のものはなかった。「手さぐりの協定協議」から、少しずつ、しかし確実に「手づくりの交流」へと、移りつつあった。



写真2 国際シンポ2009

## (2) 「こういう大学と協定を結びたいよね」

国際シンポジウムに際して来日して下さった Junko 先生と Madalena 先生には、県大でおこなわれている社会人向け医療分野ポルトガル語の授業の見学や（実際には、Junko 先生も Madalena 先生も、講師から質問を受ける受講生に対して横で答えをささやくなど、茶目っ気交じりの和気あいあいとした授業への参加であった）、高等言語教育研究所で USP における日本語教育についての講話をしていただくことで、限られた時間ながらも、できるだけ県大を知っていただく機会をつくった。その活動の合間のことであったと思う。「小さい大学ですが、スペイン語も専科としてありますし、専科ではないですが、ポルトガル語も教育がおこなわれている上に、先生方がご専門とする日本研究も学部として存在します」と、すでに最初の協議時点で私が述べていたことを、実際に見ていただいた上で述べたところ、Junko 先生が Madalena 先生と私に向って、

「小規模でも、こういう大学と協定を結びたいよね。署名手続はどうしましょう？」と言われたのである。待ちに待った第2弾の「心の中のガッツポーズ」の瞬間であった。1年前の不躰な訪問以来、Junko先生とMadalena先生のおかげで、すでに非常に良好な関係を築かせていただいていたが、国境を跨いでお互いの大学に足を踏み入れた今、本当の意味で「心が通じ合った」ことを実感したのであった。Junko先生の温かいお言葉に対して、私は率直に喜びをお伝えし、両先生に翌月に再度、上川先生とブラジルへ渡航予定であることから、USPの哲学文学人間科学部の国際協力局で今後の協定締結に向けた手続きの詰めをしたいとお願いした。

これには理由があった。2008年11月にブラジルへ渡航した際、我々はUSPとの協定のための協議のみをおこなってきたのではなく、サンパウロに本部を置く「愛知県人会」とも交流を図っていた。南米であれ北米であれ、世界でも大規模の日系人社会が存在するところは、多くが九州や東北の出身者の県人会をもつが、ブラジルには中規模の愛知県人会が存在する。ブラジルの場合、1970年代初頭まで移民を受け入れており、愛知県からもそれなりの戦後移民が渡ったことによる。ほかならぬ、本交流協定の火付け役となったシンチア・ヤバセが県費留学生であったことは、その証左である。2009年12月の渡航の際には、日本の中世仏教について上川先生が講話をし、そのあとブラジル式忘年会に招かれた（私は突然の腰痛に襲われ、ホテルのベッドに伏していた）。

「世界に飛び出し」つつも「地域に根ざす」ことを目指すならば、「国際化」



写真3 愛知県人会

が同時に「地域化」を意味しなければならない。国境を越えた先に地域性が見いだせるような交流の中身と方法の模索は、公立大学の宿命である。少なくとも、県大はこの宿命から自由ではないし、自由であってはならない。ブラジル愛知県人会との交流は、我々にとっては、この模索の一つの形態であった。

### 3. 「越境する結びつき」の現段階（2010年6月～現在）

#### (1) 協定締結と学生交換交流の開始

上川先生と私が2度 USP を訪れ、USP より Junko 先生と Madalena 先生が1度県大を訪問することで、足かけ2年にわたる協議と交流を経て、両大学の国際学術交流協定は2010年6月に署名・締結された。運良く手にしたきっかけから出発して、1つひとつを手づかみで、大切にすべきところ・こだわりたいところを、手づくりの構えをなおざりにしないように、時間をかけて築いた信頼関係に立脚した協定だとあらためて思う。何度でも繰り返したいが、これはひとえに、USP の Junko 先生と Madalena 先生に出会えた幸運による。そして、その先生方とともに、常に迅速で正確な対応をして下さる CCint-FFLCH のスタッフの方々のおかげである。協定協議当初は前出のロザンジェラさんであったが、2011年以降はヴィヴィアン（Vivian）さんが担当して下さっている。

正式には2010年6月以降、学生の交換交流が始まることになるはずであった。ところが県大文学部日本文化学科の学生が2010年2月より、USP 哲学文学人間科学部に留学を希望したところ、協定締結校からの受入学生としての待遇を付与して下さった。2010年6月の協定締結日は我々にとって記念すべき瞬間ではあるものの、事務手続の理由からこの日になったに過ぎず、教員同士の学術研究交流であれ、学生交換交流も一方向のものではあれ、すでに始まっていたのである。

協定締結後、学生の交換交流を開始するに当たって、まず取り組む必要があったのは、USP からの学生が県大で留学できるようにするための奨学金であった。この点はこれまでのところ、双方の大学での努力によって獲得できてきたように思う。例えば、USP の哲学文学人間科学部に割り当てられている平和中島財団の奨学金のほか、県大の学内基金、USP の学内奨学金、日本学

生支援機構（JASSO）奨学金である。とりわけ最後の奨学金については、県大の国際交流室による尽力が大きく、これは少なくとも、同室担当者と我々の間で、学術レベルであれ学生交換の面であれ、小規模であろうとも交流の太さと継続性についての認識を共有していることによる。これらの奨学金を活用することで、協定締結以来、両大学では本稿末尾の【表】に示すような学生の交換交流の実績を積み上げてきた。実質的な面でも、県大で半年を過ごしたUSPの留学生が、今度は県大の大学院を受験したいと志し、現在、研究生として学んでもいる。近く、県大の大学院博士課程（日本文化専攻）の大学院生が、USPの大学院へ短期留学することも、ほぼ内定している。「小規模でも、太く長く」の学術交流は、このような姿かたちを纏いつつ、5年間という期間では充分過ぎるほどの礎石を敷くことができていると思う。

## （2）上川通夫先生による USP での講演（2011年11月）

2010年6月の協定締結を受けて、2011年11月には、同協定の窓口となっている県大側の上川先生と私（川畑）、USP側の Junko 先生と Madalena 先生との4人で、今後の具体的な協定の進め方についての協議を行った<sup>2)</sup>。そして、この機会に、USP 哲学文学人間科学部の日本文化研究所（Centro de Estudos Japoneses）で、上川先生による「日本中世の災害と思想」と題する2度の講演が実現した。時折しも、3月には東日本大震災があった年であり、外国から日本に注がれる視点は、常にこの大惨事に関連づけられていた。それだけに、日本の「現状報告」ではなく、自然災害をめぐる日本の「現状」がどのような時間軸の下で存在してきたのか、身分制が人々の生きる意志を阻む中で、日本の列島に住む人々は、どのような希望を主体的な意志として表出しようとしてきたのかを、東アジアという当時の世界の文脈で説いた上川先生の話は<sup>3)</sup>、聞き

2) この点に関しては、上川通夫「海外からの風——ブラジルとペルーでの学術交流紀」愛知県立大学『愛知県立大学日本文化学部論集（歴史文化学科編）』3巻（2011年）、23～24頁に、簡にして要を得えたまとめがある。

3) この講演は、USPのほか、ロンドリーナ州立大学（Universidade Estadual de São Paulo - UNESP）（Universidade de Estadual de Londrina - UEL）でも行われたが、内容は同じである。これを活字にしたものとして、上川通夫「日本中世の災害と思想」愛知県立大学『愛知県立大学日本文化学部論集（歴史文化学科編）』3巻（2011年）、25～36頁を参照。



写真4 上川先生講演

入る聴衆の関心を一手に引き寄せる感があった。「現在を歴史的に捉える」ことについての、日本からの学問的発信である。今から振り返っても、時宜を得た企画であったことはもちろんのこと、協定締結後の最初の学術交流に相応しいものであった。また、県大の日本文化学部の2学科——国語国文と歴史文化——の1つの看板である「日本の日本研究としての歴史学」の到達点を示すには、十分なものであったと思う。

### (3) 久富木原玲先生による USP 講演 (2013年3月)

上川先生の講演から約1年半後、次はもう1つの看板である「日本の日本研究としての文学」を示す機会を得た。それが、2013年に久富木原玲先生が USP で計2回にわたって行った源氏物語を主題とする講演である（「若紫巻の「垣間見」——『源氏物語』の絵画を手がかりに」「朧月夜の恋——『源氏物語』花の宴巻の艶なる出逢い」）。具体的には県大の、広くは日本の、古典文学研究を示す久富木原先生の講演には、内実ともに非常に大きな意味があった。というのも、協定校の USP 哲学文学人間科学部で窓口となって下さっている Junko 先生と Madalena 先生は、前述のように、東洋言語学部のポルトガル語日本語専攻に身を置く先生方であり、USP の日本文化研究はこの専攻の先生方によって担われているからである。ここで中心を成す領域が、「日本語学」と「日本文学」なのである。日本の古典文学の代表作ともいえる長編作品『源氏物語』を、特定の場面を対象にしなが、平明でありながら、作品全体をわしづかみ

にするようなダイナミックさを兼備した語り口で、聞き手の心に沈殿させていく久富木原流講演スタイルが、USPの学生に熱烈に迎えられたことは言うまでもない<sup>4)</sup>。講演後に、哲学専攻の学生で、将来的には日本の大学院で学び、「源氏物語をポルトガル語に訳してみたい」と言った学生もいたほどである。

久富木原先生の講演には、多くの幸運がついてもきた。その一つが、『源氏物語』と並ぶ代表的な日本の古典文学『枕草子』のポルトガル語訳の刊行時期が到来していたことである。足かけ10年にわたり、Madalena先生とJunko先生を中心とする同専攻の先生方が、地道に原文から現代語訳、そこからポルトガル語への翻訳と、検討と議論を重ねた文字通りの血と汗の結晶である。久富木原先生の帰国後間もなく上梓されたが、1部をJunko先生とMadalena先生からの「お土産」として、ちょうどこの時期に来日したUSPからの派遣留学生在が持ってきてくれたことも、大きな喜びであった。『枕草子』のポルトガル語訳は、紛れもなく、次項に見る国際シンポジウム開催の大きなモチベーションの1つであった。本協定に基づく県大とUSP哲学文学人間科学部の「共同企画」である。



写真5 久富木原先生講演

4) 講演そのものの内容については、久富木原玲「【ブラジル・サンパウロ大学における学術交流記】——若紫巻の「垣間見」——『源氏物語』の絵画を手がかりに」『愛知県立大学日本文化学部論集（国語国文学科編）』5巻（2014年）、1～14頁を参照。

## (4) 県大・USP 哲学文学人間科学部共同国際シンポジウムの開催(2013年12月)

USP の先生方による『枕草子』のポルトガル語訳の刊行は、海外の協定校の日本研究の水準を誇るものとして、県大の日本文化研究にとって、実に大きな意味があった。すでに久富木原先生の講演時に着想しつつあった共同国際シンポジウムは、「古典文学の多元的地平——翻訳文学と歴史学との結節点をもとめて——」とする壮大なテーマのかたちを得て、2013年12月14日に開催されることになった<sup>5)</sup>。県大からは日本文化学部の約半数の教員が報告者、コメンテーター、司会として登壇し、USP からは Junko 先生（「古典日本語のポルトガル語訳—『枕草子』の場合—」）と Madalena 先生（「ポルトガル語と翻訳—『枕草子』の場合—」）を再度お招きし、講演をいただいたほか<sup>6)</sup>、これに加えて今回は、日本の古典日記文学、外国（チェコ）から日本語・日本文学を捉える眼、比較の視点から日本古典文学を位置づける、3名の専門家に加わっていただいた。総勢13名という登壇者の数もさることながら、本シンポジウム開催の出自が USP における『枕草子』のポルトガル語訳の発刊であり、「日本（語）」と「異文化（外国語）」の遭遇と格闘の場面を見事に現すこの起点が、非常に有効に作用する企画となった。内容は日本の「言語」や「文学」から、「歴史」や「社会」への隣接領域にまでまたがり、県大における「日本の人文社会研究」が、時間的空間から地理的空間の相違によって、あらゆる角度からいったんは突き放されて、ふと自分の研究上の足元を見つめ、考え込み、再認識する、極めて有意義な試みであった。既述の【表】で一覧できるが、2008年から始まった県大と USP の出会いは、5年の歳月の中で、教員自らが研究を国外に発信し、交換し、互いの研究を豊饒なものとすることで、信頼関係の構築から固い友情にも似た関係を確立してきたことがわかる。両大学の学生の絶えることのない交換交流は、そうした研究上の信頼・友好関係の上に屹立して

5) この点は、本シンポジウムの経緯、内容、成果について詳細に解題している、久富木原玲、宮崎真素美、丸山裕美子「2013年愛知県立大学・サンパウロ大学哲学文学人間科学部共同国際シンポジウム」『愛知県立大学文字文化財研究所年報』7巻（2014年）、57～62頁に譲りたい。

6) USP の先生方の『枕草子』の翻訳の過程については、織田順子（オタ・ジュンコ）「枕草子をポルトガル語に訳した経験から」、『愛知県立大学日本文化学部論集（国語国文学科編）』5巻（2014年）、15～18頁が詳しい。



写真6 国際シンポ2014

いと見るべきである。「手さぐり」の国際交流が「手づくり」のそれへと変化した先の、国際学術交流の1つの集大成であったように思う。

### おわりに——協定のこれからと個人的な雑感

本稿表題のポルトガル語訳“Cinco anos de Convênio Acadêmico Internacional entre a Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas da Universidade de São Paulo (FFLCH-USP) e a Aichi Prefectural University (APU): resultados de tentativas e acertos”を再度和訳すると、「USP 哲学文学人間科学部・県大国際学術交流協定5周年——試行錯誤と成功の産物」となるうか。日本語に見合うポルトガル語訳もまた、Junko 先生と Madalena 先生との協働である。「手さぐり」の用語には「試行錯誤」の“tentativas”を、「手づくり」の表現には「的中していること」を意味する“acertos”を充て、それらの「成果・産物 (resultados)」として下さった。我々ならではの協定の5年間の動静を、見事に言い当てて下さったと思う。突っ走ってきた5年間であったようにも思うが、「相互の交換」はまだまだ続く。

2016年9月から約2ヶ月の間、久富木原玲先生が USP 哲学文学人間科学部大学院の客員教授として、ブラジルで集中講義を担当される予定である。県大国際交流室の快進撃はますます続き、従来では考えられないほどの学生受入・派遣のための奨学金枠が確保され、学生交換交流もますます活発化する兆しを

示している。そしてより重要なことは、今後の交流は、より幅広いカウンターパート間の交流が望まれていることである。県大からは上川、久富木原、そして川畑以外の教員が、USPからも Junko 先生や Madalena 先生の同僚の先生方の往来によって、本学術交流協定をよりいっそう骨太のものにしていく必要がある。しかも本協定の対象には、事務職員の交換交流も含まれる。大学全体が本腰で前向きに取り組むべき課題として、併せて私自身の課題である意味も込めて、提示しておきたい。

さて、ちょうど本稿を書き上げようとしている2015年11月18日現在、私は、長期学外研究先であるマドリッドから南米ペルーのリマへと、大西洋縦断中である（同日13時マドリッド発イベリア航空6651便）。そのルートは、イベリア半島のマドリッドからスペイン南部の町カセレス、ポルトガルのマデイラ島、アメリカ合衆国ワシントン D.C. のジョージタウン、そしてペルーのリマと、ちょうど南西方向に降りてくる格好だ。カセレスは19歳の時の旅で2ヶ月滞在した町、マデイラ島は大航海時代の研究に欠かせない場所として常に憧れ続けてきた島、ジョージタウンは高校時代にこの大学の付属校に短期留学した過去があるところ、そしてリマは、20代の半分を過ごした自分の故郷のような町。私なりの国際交流の人生の軌跡でもある。

今般、調査研究のためにリマへ赴くのに際して、Madalena 先生と Junko 先生から USP 大学哲学文学人間科学部の日本文化研究所の日本文化研究所で、私の専門である憲法について話す機会をいただいた。22日早朝にサンパウロ入りし、25日午前10時より、USP 哲学文学人間科学部東洋言語学科にて、“Constituição ‘imposta’ e/ou Política ‘submissa’? A Sociedade Japonesa de Pós-guerra sob o sistema imperial ou de *Tennō*”（邦題『『押し付けられた』憲法か、だからこそ／それとも、『言いなりの』政治か？——天皇制の下での戦後日本社会』）について、ポルトガル語で話す予定である（追記を参照）。ブラジルの大学で話をする機会は何度か得てきたが<sup>7)</sup>、USP では初めてのことである。その事情は

7) Hiroaki Kawabata, “Algumas características do constitucionalismo histórico japonês”, in Aichi Prefectural University, *Bulletin of Department of Japanese History and Culture—School of Japanese Studies*, No. 3, 2011 (愛知県立大学『愛知県立大学日本文化学部論集（歴史文化学科編）』3巻（2011年）, pp. 55-64.

割愛したいが、生涯の宝と思える Junko 先生と Madalena 先生との知遇を得てから5年間、これも「手さぐり」と「手づくり」の奮闘の、わずかながら1つの成果とさせてもらいたい。これから先、何度も反芻するであろうこの機会を、今後に繋げられる学術交流となるように努力したいと思う。

【表】

	受入学生	派遣学生	学術交流（シンポ、講演等）
2009年度			県大国際シンポジウム（2009年11月・県大） Junko Ota 「ポルトガル語・日本語の比較研究からの日本文化」 Madalena Hashimoto 「美術史からの日本文化」
2010年度		(1*)	
2011年度	0	2	上川通夫（2011年11月・USP） 「中世日本の災害と思想」
2012年度	1	2	久富木原玲（2013年3月・USP） 「若紫巻の「垣間見」——『源氏物語』の絵画を手がかりに」「朧月夜の恋——『源氏物語』花の宴巻の艶なる出逢い」
2013年度	2	4	国際共同シンポ（2013年12月・県大） Junko Ota 「古典日本語のポルトガル語訳—『枕草子』の場合—」 Madalena Hashimoto 「ポルトガル語と翻訳—『枕草子』の場合—」
2014年度	2	0	
2015年度	0	2	川畑博昭（11月・USP） “Constituição ‘imposta’ e/ou Política submissa? A Sociedade Japonesa de Pósguerra sob o sistema imperial ou de <i>Tennō</i> ”（邦題「『押し付けられた』憲法か、だからこそ/それとも『言いなりの』政治か？——天皇制の下での戦後日本社会」）

(\*は協定締結以前であるが、協定による学生として USP が受入れた学生である。)

## 追記

予定通り、2015年11月25日、私は USP 哲学文学人間科学部で、(邦題)『『押しつけられた』憲法か、だからこそ/それとも、『言いなりの』政治なのか?——天皇制の下での戦後日本社会』と題して講演を行った。以下は、その様子である。(2015年12月21日記)

